

家具配置による簡易なグループホーム環境改善に向けた研究

グループホーム 家具配置 環境改善
ダイニング リビング 分節化

正会員 ○ 黒木 宏一*

■はじめに

認知症高齢者向けグループホーム（以下、GH）に関する既往研究は、豊かな共用空間を有した先駆的事例を対象としたものや、民家改修型の住宅要素に着目し、住宅要素が入居者の暮らしにもたらす効果を検証した研究などが挙げられ、GHの計画手法に有用な知見を数多く得てきた。

しかしながら、これまで建設されてきた新築型GHの多くは、一体的な共用空間と個室群で構成される単調な空間構成によるものが一般的であり、豊かな施設環境を有しているとは言いがたい。こうした新築型GHの環境をいかに改善するかが、今後の課題の一つである。









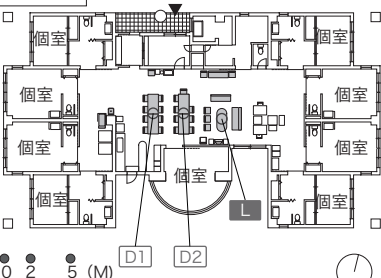
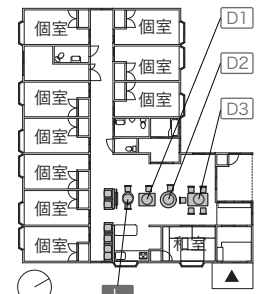
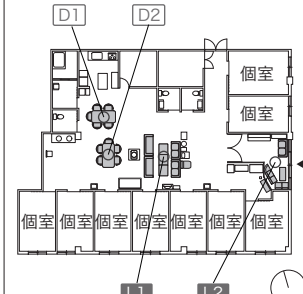
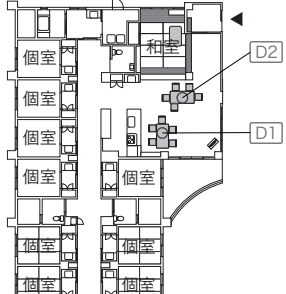
本研究は、前述した特徴を有する新築型に対して、家具配置といった簡易な方法でGHの環境を改善するための指針を得ることを目的とする。

■調査概要

新潟県下のGH205件に対して、平面図の収集、GHの運営体制や入居者属性を把握するアンケート調査を実施し、48件の回答を得た（回収率23.4%）。回収図面を元に、共用空間と個室群、廊下の構成から、中央共用型（38%）・片側共用型（33%）、ホール型（19%）の3タイプに分類した。

また、廊下の家具・畳スペースの有無などを考慮し、4事例を選定し、9:00～17:00間の観察調査を実施した（2012年11月～2013年1月）。

表1. 調査対象事例概要

事例名	KJ	WG	HK	MY
所在地	上越市	燕市	上越市	小千谷市
運営母体	社会福祉法人	社会福祉法人	有限会社	社会福祉法人
開設年度	1997.4	2005.6	2006.6	2006.1
入居者数	9名	18名	18名	18名
平均介護度	2	2.7	2.4	2.4
延床面積	372.4㎡	270.8㎡	289.9㎡	298.5㎡
共用空間面積	63.1㎡ (LDのみ)	51.8㎡ (LD:40.6 和室:11.2)	90.2㎡ (LDのみ)	65.5㎡ (LD:47.4 和室:17.8)
空間構成タイプ	中央共用型 	片側共用型 	ホール型 	片側共用型 
家具レイアウトタイプ	LD分節型 	LD分節型 	LD分節+L分散型 	D単独型 
平面図				
<p>【備考】2ユニットの調査に当たっては、自立度の高いユニットを選択。入居者の平均介護度・延床面積は調査対象ユニットに準ずる。/入居者が利用できる家具をグレーで示した。/平面図中のD Lは図1のグラフと対応。</p>				

■家具配置のパターン（表1）

家具配置のパターンは、リビング、ダイニングが分節化されたLD分節型（KJ・WG・HK）と、ダイニングのみのD単独型（MY）に分類される。LD分節型は、ダイニングスペースを多く確保する事例が多いものの、HKのように、主となるリビングスペース以外にエントランスに設けるなどの事例（LD分節+L分散型）もある。

■家具配置と滞在時間との関係（図1）

D単独型のMYは、ダイニングに滞在場所が集中しており、D1・D2の割合は同等である。LD分節型では、WGはダイニングに集中しており、座席数の多いD3の割合が最も高く、リビングの滞在はほとんどない。一方で、KJはダイニング、リビングと、滞在場所が分散している。HKではダイニング、リビングに加え、エントランス周りのリビングも利用されており、MYと比べ、滞在場所がさらに分散化している。L、Dが分節化されることと、HKのようにリビングを複数設け、さらに分散させることで、入居者の居場所が多様化している。一方、WGのように少人数でしか過ごすことのできないダイニング構成の場合は、利用がされにくく居場所がDに限定されてしまう。

■家具配置と会話数・笑顔数の関係（図2）

図2は、入居者個々の会話数、笑顔数を合計し、場所別にみたものである。WGでは、会話数は滞在時間の長

さに比例して増加している。MYではD1・D2と滞在時間に大きな違いがないものの、D1の会話数が多い。D1は自立度の高い入居者の席が集まっており、そのことが会話の多さに繋がっている。KJでは滞在時間の高さとは関係なく、圧倒的にLの会話数が多い。ダイニングでは決まった入居者同士の居合わせ方＝「話す相手」となるが、リビングでは、時間帯や活動に応じて居合わせる入居者が入れ替わっており、この「話す相手」の変化が会話数の多さに繋がっている。HKでは、L2での滞在時間はL1と共用空間と比べると少ないものの、会話数は同等である。L2はGHの中で唯一外部と接する空間であり、外部の眺めをきっかけとして、様々な話題が生まれ、会話の多さに繋がっている。また、笑顔数は、概して会話数の多さに比例しており、KJやHKでは特にリビングの空間での発生が顕著である。このように、座席が固定されやすいダイニングとは別に、活動に応じて居合わせ方が変化するリビングを適切に設けることで、会話や笑顔の増加に繋がる。

■ 設えと入居者の行為との関係 (図3)

図3は、家具と入居者の行為に着目した場面である。
【縁側の空間：場面1】 外を眺めながらお茶を飲んでいる場面である。住宅の縁側のような空間を家具によって設けることで、外の眺めをきっかけにした豊かな会話や過ごし方が生まれている。
【活動の誘発：場面2】 本棚からとってきた本を隣の入居者に手渡す場面である。ダイニングやリビング周りに、入居者のお気に入りのものや本の置き場を用意する事で、入居者自らが活動を展開するきっかけが作れる。
【プライベート空間の拡張：場面3】 入居者が自室近くのソファでくつろいでいる様子である。個室からの移動の際に、こうした場所を確保することで、個室の外にプライベートな空間を拡張できる。
【個と集団との調節：場面4】 食堂を訪れた入居者が集団に加わらずに一人で居る場面である。集団から距離を置いた場所にソファを置くことで、個と集団との距離を緩やかに保つといった調節が可能となる。

■ まとめ

一般的な新築型のような単調な空間構成であっても、家具配置によって入居者の過ごし方は大きく異なる。食事の場となるダイニング、様々な活動の場となるリビングを明確に分節化すること、多様なリビングを分散配置することや、集団や個の過ごし方を多様化させる・主体的な活動を誘発させる家具配置によって、より豊かな環境へと改善す

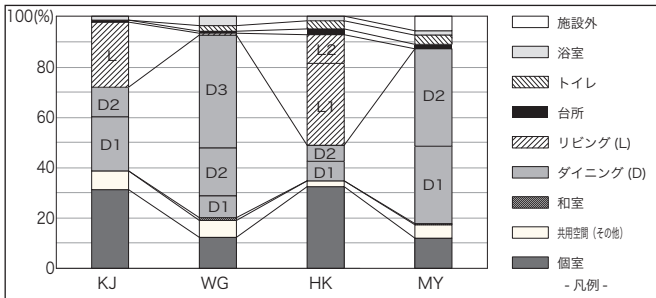


図1. 諸空間における入居者の滞在時間の割合 (平均)

* 新潟工科大学工学部 建築学科 准教授・博士 (工学)

ることが可能となる。

注) 本稿は、平成24年度・新潟工科大学建築学科卒業論文「家具配置による簡易な高齢者施設の環境改善に向けた研究 (米山博規)」を加筆修正したものである。

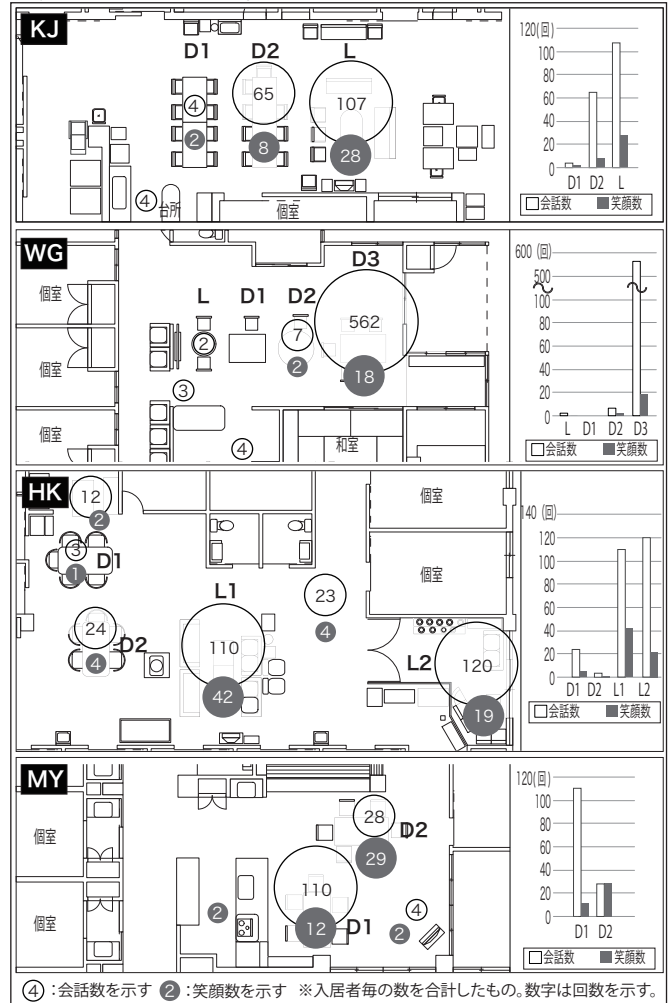


図2. 家具配置と会話数・笑顔数との関係

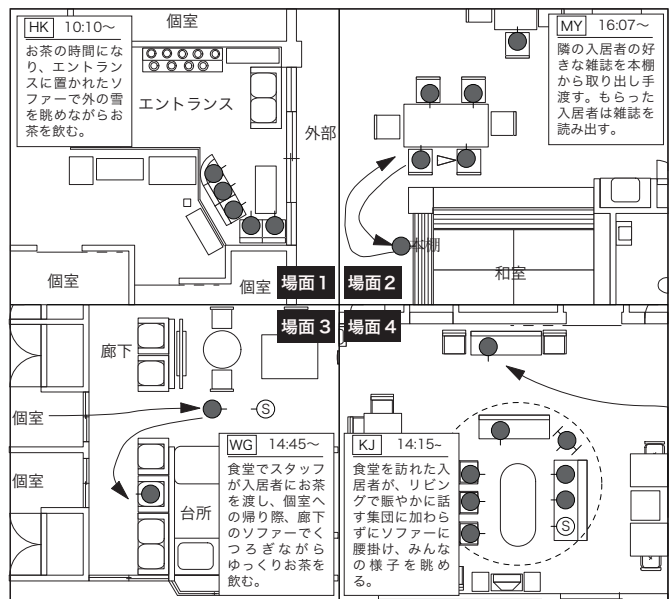


図3. 家具と過ごし方・行為との関係

Associate Professor, Department of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata Institute of Technology, Dr.Eng.